

日本の女性医師第1号

# 荻野吟子

おぎの

ぎんこ



人  
その友のために己れの命を損<sup>す</sup>つるは  
是より大なる愛はなし

(写真) 鹿鳴館スタイルに身を飾った荻野吟子

# 吟子誕生

荻野吟子は、嘉永4年(1851)3月3日、現在の妻沼町の名家に、父綾三郎、母嘉与の五女として生まれました。

吟子の父は、我が子や村の青年たちのために講師を招いて学問を講じてもらっていましたが、兄たちがあまり熱心でなかったのに対して、幼い吟子は学問好きのたいへん利発な子でした。

13歳の時に、近くの大竜寺の住職北条察源が開設した「行余書院」という寺子屋で基礎教育を受けた後、17歳の時には、儒学者の寺門静軒てらかど せいけんが開設した「両宜塾」りょうぎじゅくで松本万年に師事しました。ここで吟子の学問の才能が開花し、ますます向学心を培っていきました。



(写真) 荻野吟子生誕之地史跡公園

# 女医への決意



(写真) 当時の両宜塾りょうぎじゅく

吟子は、学問の師である松本万年が「眼千両」と賞讃するほどの成長ぶりでした。

そして、慶応4年(1868)、吟子は村人の羨望を一身に集めて、北埼玉郡上川上村(現在の熊谷市)の名主、稲村貫一郎と結婚しました。

ところが、不慮の病に冒され、2年後の明治3年に離婚し、松本万年の勧めで東京の病院に入院しました。

このとき、男性の医師に治療を受けた際の耐え難いまでの羞恥、屈辱感が、吟子に女医の必要性を痛感させ、自ら医師となる決意をさせたと伝えられています。

# 女医への苦難の道

当時の日本では、女性が医者になるなどおよそ考えられない時代でした。ましてや、医学校への女性の入学など認められるはずもありませんでしたので、吟子は、明治8年（1875）、この年に開校したばかりの東京女子師範学校（後のお茶の水女子大学）に入学、同12年に卒業しました。

その後、女医の必要性を訴える吟子の熱意が関係者を動かし、私立医学校「好寿院」への入学を果たしました。好寿院では、女性への偏見と闘い、また家庭教師を続け苦学しながら、同15年、優秀な成績で卒業しました。

しかし、医術開業試験の受験願書を東京府庁や埼玉県庁に何度提出しても、女性であるがゆえに却下されてしまいましたが、吟子はあきらめませんでした。



（写真）東京女子師範学校卒業時の荻野吟子（後列左端）

# 医術開業試験に女性で初めて合格



（写真）当時の内務省

ある日、いよいよ吟子は、規則改正を求めて内務省衛生局長への面会を果たしました。そのとき、「<sup>りょうのぎげ</sup>令義解」という古文書に女医の記述があることを訴えたと言われています。この「令義解」を校訂し、後世に引き継いだ人が、埼玉の偉人、塙保己一でした。塙保己一が、吟子が医者になることを手助けしたと言えるでしょう。

こうした吟子の女医への熱い思いが通じ、遂に明治17年（1884）に内務省医術開業試験規則が改正されました。その第1回目の前期試験には吟子を含め4人の女性が受験しましたが、合格したのは吟子だけでした。そして翌18年3月の後期試験にも合格し、吟子35歳の時に、日本で最初の女性医師となりました。

吟子は、明治18年5月、本郷湯島三組町に念願の「産婦人科 荻野医院」を開業しました。当時の新聞や雑誌がこの開業の報道に紙面を惜しまなかったため、一躍脚光を浴びました。

# 女性の権利確立を目指して

吟子は、診療を続けるうちに、患者の背景に貧困や社会習慣等の問題を感じ、明治19年（1886）にキリスト教に入信しました。

同年、万国キリスト教婦人矯風会普及のために来日したアメリカのレヴェッツ女史の演説を聞いたことがきっかけとなり、東京婦人矯風会の結成に参加しました。吟子はその風俗部長に就任し、婦人覚醒運動や婦人参政権運動などの社会的活動を開始しました。

中でも、明治23年公布の「集会及び結社法」に婦人の議会傍聴を認めないという条項があったため、「婦人の議会傍聴禁止に対する陳情書」を作成し、これを撤回させる運動を繰り広げた結果、婦人の議会傍聴が許されることになりました。

婦人団体の政治運動が功を奏した最初の出来事として、その意義は特筆に価する画期的なものでした。



(写真) 帝国議会第1回仮議事堂

# 志方との再婚、そして渡道



(写真) 夫・志方之善しかたゆきよし (中央に立っているのが志方之善)

明治23年(1890)、青年牧師志方之善しかたゆきよしと巡り会い、吟子40歳、志方27歳の時に、周囲の反対をおして結婚しました。ところが、結婚してからわずか半年足らずで、夫が、キリスト教徒による理想郷建設を志して北海道に渡ってしまいました。

寂寥の日々を送る中にも吟子は、「女学雑誌」に「本邦女医の由来乃其前途」という生涯唯一といわれる論文を発表しています。

その後、吟子は、夫に協力するため、同27年にイマヌエル(今金町)に入植しましたが、理想郷建設は思うように進まず、同30年、現在の瀬棚町に移り、医院を開業しました。

同38年、夫が肺炎のため42歳で急逝。吟子は同41年に帰京し、本所区新小梅町に医院を開業し晩年を送り、大正2年(1913)6月、波乱に満ちた63歳の生涯を閉じました。

# 荻野吟子年譜

	年齢 (数え年)		年齢 (数え年)	
嘉永 4年 (1851)		●3月3日、武蔵国幡羅郡俵瀬村（現妻沼町）に綾三郎、嘉与の五女として生まれる	明治19年 (1886)	36 ●本郷教会にて洗礼を受け、キリスト教婦人矯風会設立に参画し、風俗部長となる
文久 3年 (1863)	13	●葛和田村（現妻沼町）大龍寺の寺子屋「行余書院」に入り、北条察源に師事	明治21年 (1888)	38 ●大日本婦人衛生会幹事となり、翌年「婦人衛生会雑誌」を創刊する
慶応 3年 (1867)	17	●両宜塾（寺門静軒開設）を継承した松本万年に師事	明治23年 (1890)	40 ●議会の婦人傍聴禁止撤回運動に参画する
慶応 4年 (1868)	18	●上川上村（現熊谷市）の名主、稲村貫一郎と結婚	明治24年 (1891)	41 ●11月、志方之善と結婚
明治 3年 (1870)	20	●病気で協議離婚、東京の病院に入院、女医を志す	明治27年 (1894)	44 ●志方、キリスト教徒理想郷建設をめざし、北海道に渡る
明治 6年 (1873)	23	●奥原晴湖の紹介で国学者井上頼圀の門に入る	明治30年 (1897)	47 ●吟子、渡道し、夫の伝道に協力
明治 7年 (1874)	24	●内藤満寿子の私塾に助教として招かれ、甲府に赴く	●瀬棚村会津町（現瀬棚町）に医院を開業	
明治 8年 (1875)	25	●東京女子師範学校に入学、12年7月に同校を卒業	●淑徳婦人会を結成し、会長となる	
明治12年 (1879)	29	●私立医学校好寿院に入学	●夫、志方之善、42歳で病死	
明治15年 (1882)	32	●同校を卒業	●北海道を引き揚げ、東京本所に医院を開業	
明治17年 (1884)	34	●医術開業試験の受験を許可され、9月前期試験に女性としてただ一人合格	●志方籍を離れ、荻野家に復籍	
明治18年 (1885)	35	●3月後期試験にも合格、公許女医登録第1号となり、5月、本郷湯島に医院開業	●6月23日、63歳で永眠	